

土とふるさとの文学全集

6



土とふるさとの文学全集

6

雲と青空と

反骨の路線

昭和五十一年二月二十日 発行

編集人

白井吉見
小田切秀雄

瀬沼茂樹

水上勉
和田傳

発行者 高橋芳郎

東京都新宿区市谷船河原町十一(〒162)

発行所 団法人 家の光協会 ©

電話 (260) 三一五一(大代表)

振替 東京 514724

印刷 奥村印刷株式会社
製本 製本株式会社

土とふるさとの文学全集 ⑤

藁草履

島崎藤村 5

カインの末裔

有島武郎 22

豚群

黒島傳治 47

防雪林

小林多喜二 54

夜風

平林たい子 107

耕地

平林たい子 121

荒っぼい村

武田麟太郎 135

豊年飢饉

徳永直 150

万宝山

伊藤永之介 162

青幻記

一色次郎
433

ハタハタ

吉村 昭
498

金色の朝

三浦哲郎
525

解説

國分一太郎
534

年譜

555

装丁

伊藤 憲治

編集協力

南雲 道雄

葦山 圭介

赤星虎次郎

藁 草 履

島 崎 藤 村

長野県北佐久郡岩村田町大字金の手の角にある石が旅人に教えて言うには、是より南、甲州街道。

この道について南へさして行くと、八つが嶽山脈の麓へかけて南佐久の谷が眼前に披けて居ります。千曲川はこの谷を流れる大河で、沿岸に住む人民の風俗方言も川下とは多少違ふかと思われまします。岸を溯るにつれまして、さすがの大河も谿流の変るのですが、河心が右岸の方へ酷く傾いで居りますので、左岸は盛上つたような砂底の顯れた中に、川上から押流された大石が埋つて、ところどころに白楊、蘆、などの叢が茂つて居ります。右岸に見られるのは、楓、漆、樺、檜の類。甲州街道はその蔭にあるのです。忍耐に富んだ越後商人は昔からここを通行しました。直江津の塩物がこの山地に深入したのも専らこの道を千曲川に添うて溯りましたもので。

兩岸には、南牧、北牧、相木、などの村々が散布して、金峯山、国師山、甲武信嶽、三国山の高く聳えた容を望むことも出来、又、甲州に跨つた

八つが嶽の連山には、赤々とした大崩壊の跡を眺めることも出来ます。この谷の突当つたところが海の口村で、野辺山が原はつい後に迫つて居るのです。海の口村は、もと河岸に在りましたのが、河水の氾濫をました為に、村民は高原の裾へ倚つて移住したとのこと。風雪を防ぐ為に石を載せた板葺の屋根を見ると、深山の生活も思いやられます。この辺に住んで居りますのが懐悍な信州人でして、その職業には、牧馬、耕作、杣、炭焼——わけても牧馬には熱心な人民です。この手合が馬を追ひながら生活を営る野辺山が原というのは、天然の大牧場——左様さ、広さは三里四方も有ましようか、秣に適した灌木と雑草とが生茂つて、ところどころの樹蔭には泉が溢れ流れて居るのです。ここへ集るものは、女ですら克く馬の性質を暗記して居る位。男が少年のうちからして乗馬の術に長けて居るのは、不思議でもなんでも有ません。土地の者の競馬好と来ては——そりゃあ、もうこの手合が酒好と同じように。

こういう土地柄ですから、女がどんな労働をして居るか、大凡の想像はつきましよう。男を助けて外で甲斐々々しく働く時の風俗は、股引、脚絆で、盲目縞の手甲を着めます。冠りものは編笠です。娘も美しいと言いたいが、さて強いと言つた方が至当で、健な活々とした容貌のものが多い。

海の口村が産馬地という証拠には、一頭や二頭の家養をしないものはないのでも知れましよう。

何がこの手合の財産かなら、無論、馬です。

清仏戦争の後、仏蘭西兵の用いた軍馬は吾陸軍省の手で買取られて、海を越して渡つて来ました。その中の十三頭が種馬として信州へ移されたのです。氣象勇健な『アルゼリイ』種の馬匹が南佐久の奥へ入りまし

たのは、この時のことで。今日一口に雑種と称えて居るのは、專にこの『アルゼリイ』種を指したものです。その後、亜米利加産の浅間号という名高い種馬も入込みました。それから次第に馬匹の改良が始まる、野辺山が原の馬市は一年増に盛大になる、その噂さがながしの宮殿下の御耳にまで届くようになります。殿下は陸軍騎兵附の大佐で、かくれもない馬好でいらせられるのですから、御寵愛の『フアラリス』という亜刺比亞産を種馬として南佐久へ御貸付になりますと、さあ、人氣が立ったの立たないのじゃ有ません。『フアラリス』の血を分けた当歳が三十四頭という呼声になりました。殿下の御喜悅は何程でございましたらう——とうとう野辺山が原へ行啓を仰出されましたのです。

壹

「爺、己もお前も此頃馬を買った覚がある。どうだい、この馬は何程の評価をする——え、背骨の具合は浅間号に彷彿だ。今日この原へ集った中で、是程良い馬は少なからう」

と一人の馬喰が手を隠して袖口を差出す。連の男は笑いながらその内へ手を入れて、

「こうだ」

「ふふ、そうさ」

と傍に手綱を控えて立って居る若者に会釈して、

「若い衆、怒っちゃいけません。少々私にこの馬を撫でさして御呉んなしよ」

光沢を帯びた栗毛の腰の辺を撫下し、やがて急に尻毛を掴んで、うんと持上げて見ました。

「まあ私が買えばこの馬だ」

若者は馬喰の言葉に、したたか世辭を言われたという様子で、厚い口唇に自慢らしい微笑を湛えました。

源吉といふのがこの若者の名で、それを山家の習慣では頭字ばかり呼んで、源で通る。海の口村の若い農夫には、いずれも綽名があつて、源のは『藁草履』というのでした。それは山家の者が手造にする不恰好な平常穿を指したもので、醜男子という意味をあらわしたものです。いかさま、日に焼けたその顔は——鼻付の醜さから、目の細さ加減、口唇の恰好、土にまみれた藁草履を思出させる。しかし、源も血氣盛な年頃ですから、若々しい頬の色なぞには、万更人を引きつけるところが無いでもない。それに筋骨の逞しさ、腕力の勝れて居ること、まあ野獸と格闘をするにも堪えると言いたい位で、容貌は醜いと言いましても、強い健な農夫とは見えるのでした。

功名心の深い源は、その競馬の催に野辺山が原附近の村々から集る強敵を相手にして、晴の勝負を争う意気込でした。最後の勝利、無上の榮譽などを考えて、昨夜はおちおち眠りません。馬には、大豆、馬鈴薯、藁、麦殻の外に糯米を宛てがって、枯草の中で鳴く声がすれば、夜中に幾度か起きて馬小屋を見廻りました。しかし、この野辺山が原へ上つて来て、冷々とした清しい秋の空氣を吸うと、もう蘇生したようになりましたのです。高原の朝風は何の位心地のよいものでしょう。源は直にゆうべの疲勞を回復してしまいました。それに、人の氣を悪くするような誇張をやりがたがるのが、この男の性分で、そここ馬を引廻して、碌々觀相も弁えない者が「そいッたつても、まあ良い馬だいなあ」とでも褒めようものなら、それこそ源は人を見下げた目付をして、肩を動つて歩

く。ところへ、馬喰の言草があれでしょう——源が微笑する訳なんです。

殿下の行啓と聞いて、四千余人の男女が野辺山が原に集りました。馬も三百頭ではききまずまい。それは源が生れて始めての壮観です。御飯屋は新しい平張で、正面に、緑の幕、緑の机掛、うしろは白い幕を引廻し、特別席につづいて北向に厩、南が馬場でした。川上道の尽きて原へ出るところに、松の樹蔭から白く煙の上るのは商人が菓を作ったので、そこでは山葡萄、柿などの店を出して居りました。中には玉蜀黍を焼いて出すもあり、握飯の菜には昆布に鮎の煮付を突出に載せて売りました。

源の功名を貪る情熱は群集の多くなるにつれて、胸中に燃上りましたのです。源の馬というのは『アルゼリイ』の血を享けた雑種の一つで、高く首を揚げながら眼前に人馬の群の往ったり来たりするのを眺めるとさあ、多年の間潜んで居た戦好な本性を顕して来ました。頻と耳を振って、露深い秋草を踏散して、嘶く声の男らしさ。私に勝利を願うかのよう。清仏戦争に砲煙彈雨の間を駆廻った祖の血潮は、たしかにこの馬の胸を流れて居りました。その日に限っては、主人の源ですら御しきれません——ところどころの松蔭に集る娘の群、紫絹の美しい深張を翳した女連などは、叫んで逃げ廻りました。

急に花火の音がする。それは海の口村で殿下の御着を報せるのでした。物売の店の辺から岡つづきの谷の人は北をさして走ってまいります。川上から来た小学生の一隊は土塵を起てて、馳走で源の前を通過しました。

御飯屋の前の厩には、二百四十頭の牝馬が繋いでありましたが、わけ

ても殿下の亜刺比垂産に配せた三十四頭の牝馬と駒とは人目を引きました。この厩を四方から取囲いて、見物が人山を築く。源も馬を競馬場の溜へ繫いで置いて、御飯屋の北側へ廻って拝見すると、郡長、郡書記なども『フロックコウト』の折目正しく、特別席へ来て腰を掛ける。双眼鏡を肩に掛け、白いしなやかな手を振って、柔かな靴音をさせる紳士は参事官でした。俄然、喇叭の音が鎗底から起る。次第にその音が近く聞えて来て、終には澄み渡った秋の空に鳴り響きました。

十輛ばかりの人力車が静肅な群集の中を通過して、御飯屋の前まで進みました。真先には年若な武官、次に御附の人々、大佐、知事、馬博士、殿下は騎兵大佐の礼服で、御迎の御車に召させられました。御車は無紋の黒塗、海老染模様の厚毛布を掛けて、駈込には緋の毛皮を敷き、五人の車夫は大縫紋の半被を着まして、前後に随いました。殿下は知事の御案内で御飯屋へ召させられ、大佐の物申上る度に微笑を泄させられるのでした。群集の視線はいずれも殿下に注ぎます。御年は若い盛におわしまし、軍帽を戴かせられる御姿は、どこやらに国のみかどの雄々しい御面影も拝まれるのでした。まのあたり皇族の權威を仰ぎましたのは、農夫の源にとつて生れて始めてのことです。殿下は大佐と馬博士とから『フアリス』の駒の批評を聞召され、やがて長靴のまま静々と御飯屋を下りて、親馬と駒とを御覧になる。勇しい御気象にわたらせられるのですから、もう静息していただけることの出来ないという御有様。花火は時時一団の白い煙を空に残して、やがてそれが浮び飄々雲の断片のように、風に送られて群集の頭上を通る時には、あちこちに小供の歓呼が起る。殿下もたまには青空を仰がせられて、限も無い秋の光のなかに煙の消え行く様を眺めさせられました。

背後から押される苦痛に、源は人を分けて特別席の幕外へ出ました。

殿下はまだ熱心に馬を見給う御様子。参事官なども最早飽果てて、八つが嶽の裾に展がる西原の牧場を望んで居りました。源は御茶番の側を通りぬけて、秋小屋の蔭まで参りますと、そこには男女の群の中に、母親、叔母、外に身内の者も居る。源の若い妻——お隅も草を藉いて。

「よっぽど良い馬が来た」

と源は佇立みながら独語のように。叔母は振り返って、

「道理だぞよ。そいッたつてもなあ」

「叔母さん。宮様を拝まッしたか」

「私はなあ、橋の傍で拝みやした」

母親は源の横顔を熟視って、

「源、お前も握飯はどうだい。たべろよ。沢山あつて残つても困るに」

「ああ」と源は夢中の返事、胸の中には勝負のことが往つたり来たりするばかり。名譽心の為に駆られて、饑渴いて、唯もうそわそわとして居りました。

「これさ。たべろよ」

という母親の言葉に、お隅は握飯を取って、源の手に握らせました。源は夢中で、一口それを頬張って、ぶいと厩の方へ駆出して行つて了いました。

御茶番から羽織袴で出て来た赤ら顔の農夫は源の父です。そこここと見廻して、

「源は来やせんか」と母親に饒舌声で尋ねる。

「今、ここに居たが、どこかへ駆走つちやつた」

「彼奴にも困つちまう。今日は恰で狂人見たよう。私が、宮様へ上る玉

露の御相伴をさしたい、御茶菓子のお麦落雁も頂かせたい、と思つて先刻から探して居るんだけど」

叔母は引取って、

「源さの大きくなつたには、私魂消た。全然、見違えるように。しかし、お前には少許も肖て居ねえだに」

「私にかえ。彼奴は私に肖ねえで、亡くなった祖父に肖たと見える。私は彼奴を見ると、祖父を思出さずには居られやせん」

と楽しそうに話して居りますと、『フアラリス』の駒も大概御覽済になりしたので、御飯屋の北側に記念の小松を植えさせられました。人は倦んで了つて、特別席にかしこまる官吏の影も見えません。宮は御休息もなく四列の厩を一々案内させて、二時間余も大佐、馬博士を御相手に、二百頭の馬匹の性質、血統、遺伝などを聞召され、すこしも御疲労の体に見えさせ給わないのです。花やかに熱い秋の日が照りつけるので、色白な文官の群は幕の蔭に隠れ、膝頭を揉みました。

功名を急ぐ源にとりましては、この二時間の長さが堪えられない程の苦痛でした。いよいよ競馬の催が始まるということになりましたので、四千の群集は塵を揚げて、馬場の隅際へ吾先にと馳けて参ります。源は黄色い土煙を嗅いで噎返りました。大波のように押寄る男女の雑沓、子供の叫び声——とても巡査の力で制しきれぬものではありません。「さあ、退いた、退いた」と、源は肩と肩との擦合うち中へ割込んで、漸のこゝとで溜へ参りますと、馬は悦しさうに嘶いて、大な首を源の身へ擦付けました。

その日の競馬は五組に分れて、抽籤の結果、源は最後へ廻ることになつて居りました。誰しもこの最後の勝負を予想する、轟然々々につれて

盛に賭が行われる。わけでも源の呼声は非常なもので、あそこでも藁草履、ここでも藁草履、源の得意は思いやられました。最初から四番目迄、湧くような歓呼の裡に勝負が定まって、さていよいよお鉢が廻って来ると、源は栗毛に跨って馬場へ出ました。御飯屋の北にあたる埒の際に、源の家族が見物して居たのですが、両親の顔も、叔母の顔も、若い妻の顔すらも、源の目には入りません。馬上から眺めると群集の視線は自己一人に注ぎ、とばかりで、乾燥いだ高原の空気を呼吸する度に、源の胸の鼓動は波打つようになりました。烈しい秋の光は源の頬を掠めて馬の鼻面に触りましたから、馬の鼻面は燃えるように見えました。

五人の乗手の中で、源が心に懼れたのは樺を冠った男です。白、紫、赤などは、さして恐るべき敵とも見えませんでした。源は青です。樺は一見神経質らしい、それでいやに沈着しました若い男で、馬も敏捷な相好の、足腰の締った、雑種らしい灰色なんです。樺が場を踏んだ証拠は、馬の扱いが柔かで、ゆったりとしていて、加に搜りを入れるような目付をして、他の四人の呼吸を圖って居るのでも分る。それにこの男の静な、冷い態度と言ったら——それは底の知れないような用心深いところがあった、一歩でも馬に無駄を踏ませまいと、たくさんで居るらしい。源は大連です。あまり心が激り過ぎて、乗出さぬ先から手綱を持手が震えました。

相図を聞くが早いか、五人の乗手はもう出発の線を離れる。真先に乗進んだのが源の青、次が紫、白、赤でした。樺は乗後れて見えました。

「青、青」の叫び声は埒の四方から起る。殿下は御飯屋の紫の幕のかげに立たせられ、熱心に跳入らせ給うのでした。大佐は幾度馬博士の肩を叩いたか知れません。知事も、郡長も、御附の人々も総立です。参事官

は白いしなやかな手を振りました。五人の乗手は丁度乗出した時と同じ順で、五十間ばかりの距離を波打つように乗進んで行った。源が紫に先んじたことは、樺が赤に後れたと同じ程の距離です。ですから源が振返って後を見た時は、舞揚る黄色い土煙の中に、紫と白とがすれすれに並び進んで、乗迫つて来たのを認めなければならぬ。驚破、白は紫を後に残して、真先に進む源をも抜かんとする氣勢を示して、背後に肉薄して来た。「青」「白」の声は盛んに四方から起る。源も、白も、馬に鞭つて進みました。競馬好きな馬博士は、「そこだ、そこだ」とばかりで、身を悶えて、左の手に持った山高帽子の上へ頻と握拳の鞭を呉れる。大佐は薄鬚を掻きまじした。今、源は百間ばかりも進んだでしょう。馬は泡立つ汗をびっしょり発て、それが湯滝のように顔を伝う、流れて目にも入る。白い鼻息は荒くなるばかりで、烈しく吹出す時の呼吸に、やや氣勢の尽きて来たことが知れる。さあ、源は激らずに居られませんか。こうなると気を苛つて妄に鞭を加えたくなる。馬は怒の為に狂うばかりになって、出足が反て固くなりました。遽に「樺、樺」と呼ぶ声が起る。樺はたしかに最後の筈。しかし、その樺が今迄加え惜んで居た鞭を烈しく呉れて、衰えて来た前駆の隙を狙ったから堪りません。みるみる赤を抜き、紫を抜きました。馬博士は帽子を掴潰して狂人のように振廻す。樺は奮進の勢に乗って、凄じく土塵を蹴立てました。それと覚つた源が満身の怒気は、一時に頭へ衝きかかる。如何せん、樺は驕地。馬に翼、翼に声とは是でしよう。忽ち閃電のように源の側を駆抜けていきました。

必勝を期して居た源の失望も思いやられます。勝利の旗は樺の手に落ちました。それは文字を白く染抜いた紫の旗で、外に記念の賞を添えま

して、殿下の御前、群衆の喝采の裡で、大佐から賜ったのでした。源の目は嫉妬の為に輝いて、口唇は冷嘲つたように引込みました。今は誰一人源を振返って見るものがないのです。

殿下は御機嫌麗しく、人々に丁寧な御言葉を送りまして、御車に召させられました。御通路の左右に集る農夫の群にすら、白の御手套を挙げて一々御挨拶が有りました。御附の人々、大佐、知事、馬博士などは車、参事官、郡長、郡書記、その他の官吏は徒歩、つづいて『ファラリス』の駒三十四頭、牝馬二百四十頭、牡馬の群は最後に随いました。三百頭余の馬匹が列をつくって、こうして通りますのは人目を驚かす程の盛観でした。紫の旗をかざして、凱歌を揚げて帰る樺の得意は、どんなでしたらう。さもさも勿駄振って、いやに反身になって、人を輕蔑したような目付をしながら、意氣揚々と灰色の馬に跨った様は——いやもう小癪に触って、二目と見られたものじゃない、とまあ、源は思うのでした。拝むような娘の群の視線はこの若者の横顔に注ぎました。全く、源は業が沸えて、この男の通るのを見て居られません。嫉妬は一種の苦痛です。源は自分の馬の側に仆れて、耻かしい額を草の中に埋めました。

疲労と失望とで悶え苦んで居た源が、むつくと起上った頃は——もう人々も帰ってつた。居残る人足は腰を曲めて御飯屋を取片付ける最中。幕は畳み、旗は下して、遽に四辺が寂しくなつた。細々と白い煙の上る松蔭には、店を仕舞って帰って行く商人の群も見える。馬は主人を置去にして、そこここと手綱を引摺りながら、「かしばみ」の業でも狎って居るらしい。今は、なにかも源を見下げたり、笑つたりして——小鳥ですら人を輕蔑したような声で鳴いて通る、と源には思われるの

でした。忌々敷いものです。源は腹癪のつもりで、路傍の石を足蹴にしてやつた。尊大な源の生命は名譽です。その名譽が身を離れたとすれば、残る源は——何でしょう。自分で自分を思いやると、急に胸が込上げて来て、涙は醜い顔を流れるのでした。やがて、思いついたように馬の傍へ馳寄って、力任せに手綱を引手繰りましたんです。

「こんな目に逢つたのも汝のお蔭だ」

凡夫の悲しさ、源はその日のことを馬の過失にして、さんざんに当り散した。丁度、罪人を撻つ獄卒のように、残酷な性質を顕したのです。馬に何の罪があらう。しかし畜生ながらに賢いもので、その日の失敗を口惜しく思うものと見え、ただ悄悄として、首を垂れて居りました。二重瞼の大な目は紫色に潤んで来る、幽に泄す声は深い歎息のようにも聞える。人間の苦痛ですら知られずに済む世の中に、誰が畜生の苦痛を思いやろう。生活で、勞苦いて、鞭撻たれる——それが畜生の運なんです。馬は不平な主人の後に随いて、とぼとぼと馬小屋の方へ帰って行きました。好きな飼料をあてがわれても、大麦の香を嗅いで見たばかりで、口をつけようとはしませんでした。

むしゃくしゃ腹で馬小屋を出まして、源は物置伝いに裏庭へ廻って見ますと、家には誰も居りません。櫓の枯枝にからみつく青々とした夕顔の蔓の下には、二尺ばかりもあらうかと思われるのがいくつか生り下つて、白い花も咲き残って居る。黄ばんだ秋の光が葉越しにさしこんだので、深い影は地に落ちて居りました。丁度、そこへ手桶を提げて、水を汲んで帰って来たのが妻のお隅です。源は、いきなり、熱湯のような言葉浴せかけました。

「何故、お前は己に断りもしねえで、先に帰つた」

「私かえ」とお隅は手桶を夕顔棚の蔭に置いて、「だつて父さんが帰れと言いなさるから、皆と一緒に帰りやしたよ」

「人の氣を知らねえにも程がある」と源は怒氣を含んで、舌なめずりをして、「何が可笑しい。氣の毒に思うのが至当じゃねえか」

「あれ、其様な貴方のような無理な——私は笑いもどうもしやせんよ」とお隅は呆れて夫の顔を見つめました。源は紅く顔を泣腫らして、口唇を震わせて居る様子。尋常ではない、とお隅も思いましたものの、夕飯の仕度には急ぐし、それに、なまじっか原のことを言い出して慰めて見たところで、反て氣を悪くさせるようなもの、当らず触らずに越したことはない、と秋の日脚を眺めまして、手桶を提げて立たうとする。源は前後の考があるじゃなし、不平と怨恨とですこしも眩んで、有合う天稗棒を振上げたから堪りません——お隅はそこへ仆れました。垣根の傍に花を啄んで居た鶏は、この物音に驚いて舞起つてもあれば、鳴いて垣根の下を潜るもあり、手桶の水は葱島の方へ流れて行きました。

「ちょッ、勿体をつけやがって」

と叱るように言つて、ややしばらく源は、お隅の悶え苦しむ様を見て居りました。やがて、愚い目付をしなが、

「どこか其様に痛いよ。どれ……見せろ」

源の手がお隅の右の足に触るか触らないに、女は悲鳴を揚げて顔色を変えました。

「大袈裟な真似をするな——狸め」

父親の影が見えたので、源は旁と表の方へ拔出しました。何処へ行くという目的もなく、ぶらりと出掛けて、やがて二、三町も歩いてまいりますと、さ、足は不思議に前へ進まなくなりました。源は恐怖を抱くよ

うになつたのです。

貳

「源さ、お入りや。なんだつて障子の外からなんぞ覗くんたえ」

と声を掛けましたのは鹿の湯の女亭主です。源は煤けた障子を開けて、ぬっと蒼ざめた顔だけ顯しながら、

「私は女衆ばかりかと思つて」

「女衆ばかりかと思つたら——御生憎さま」

と、炉辺で男の笑聲が起る。源も苦笑しながら入りました。

「かみさん、酒を一杯お呉れや」

鹿の湯というのは海の口村の出はずれにある一軒家、樵夫の為に村醪も暖めれば、百姓の為に干魚も炙るといふ、山間の温泉宿です。女亭主は達けた髪を櫛巻で、明窓から夕日を受けた流許に、かちやかちやと皿を鳴して立働く。炉辺には、源より先に御輿を据えて、ちびりちびり飲んで居る客がある。二階には兵士の客もある様子。炉に懸けた泥鰌汁の大鍋からは盛に湯気が起ちまして、そこに胡座をかいた源の顔へ香いかるのでした。筒袖の半天を着た赤ら顔の娘は、梯子段を上ったり下りたりして、酒を持運んで居りましたが、やがて炉辺へやつてきて、塗箸を添えた胡栗脚の膳に香の物と猪口を載せて出し、井には汁をつけて呉れる。

「さあ、御燭がつきやした」

と時代な徳利を布巾で持添えて、勧めた。源は熱燭の極ところを猪口にうけて、

「お前の御酌だ、同じ酒が余計に甘く飲めるといふもんだ」

「まあ、源さんの巧く言うこと」

「どうだい、私の女房になる気はねえかよ」

「戯語ばかりお言いでない」

客も黙っては居られませんか。黒々と生延びた髭の鬚を撫廻しながら、

「兎角、若い方の傍へは寄りたいたいものと見えるね」

と、ちらちらした目付で、娘を颯りにかかる。娘はすこし憤然として見せて、

「この御客さんも、これでなかなか学者だぞい」

「へへへへ」と客はいやに笑って、「これでとは何だよ。人間も朝から晩まで稼ぐばかりじゃ、ねっからつまりませんや。ちったあ自分の好自由になる時がなくちゃ」

「貴方、好事を教えて上る」と娘は乗出して、「明日はゆっくりお勝さんの許へ行つて、一緒に小屋の内でも本でも読みやれ」

「へへへへ、明日は日曜だ。日本外史でも読まずかと思つて」

「先生は何方ですか」と源は尋ねて見ました。

「私かね。私は大屋の者ですが、ここの登記役場の書記に出て居やすよ。私も海の口へはまだ引越して来たばかりで。これからは何卒まあ君等にも御心易くして貰わにやならん——さ、一杯獻げやしよう」

二階ではしきりに手が鳴る。娘はいそいそと梯子段を上って行ききました。急に四辺が明るくなったかと思うと——秋の日が暮れるのでした。暗い三分心の光は煤けた壁の錦絵を照して、棚の目無達磨も煙の中に朦朧として見える。

「どうです、今日の原の騒ぎは」と書記は檯を焼べて火気を盛にしなが

出たには——これにも魂消た。君も競馬を終局まで見物しましたかい」

源は苦笑をしました。書記はそれとも知らない様子で、

「さ、不思議なこともあればあるもので、私の同僚が今日の競馬に出た男のところへ娘を嫁けてあるという話さ。娘の名ですかい——お隅さん。あの子なら私は大屋で克く知つて居やす。しかも今日、原で不意と逢いやしてね。丸髻なんか結つてゐるんだで、見違えて了いやしたのさ」

と言われて、源は手を揉んで居りますと、書記は人に話をさせない男でして、

「まあ聞いて呉れ給え。こういう訳です。私が今、ここへ来る途中、同僚が着くなつて通るから、君どうしたい、と聞くと、娘のやつが夫婦喧嘩して、足の骨を折つた、医者のところへこれから行くんだ、と言つて、先生からもう大弱りさ。かわいそうに——よくよく運の悪い子だ」

聞いて居た源は急に顔色を変えて、すこし狼狽で、手に持った猪口の酒を零しました。書記は一向無頓着——何も知らない様子なので、源もすこしは安心したのでした。腹藏のない話が、こうして景気を附けては居るものの、それはほんの酒の上、心の底は苦しいので、

「先生、足の骨を折られて死んだものがごわしょうか」

と恍々顔に聞いて見る。書記は愚痴を酒の肴というような風で、初対面の者にも聞かせずには居られない男ですから——碌々源の言うことも耳に止めないで、とんちんかんな挨拶。

「私は登記役場に出てから、三年目になりやすよ。馬流の正公は私よりか前に奉職して、それで私と給料が同じだもんだで、大層口惜しがつてね。此頃も、馬流へ行つた時、正公のところへ寄つて、正公ちつたあ上

げて貰いやしたかね、と聞いたら、弱ったよ、今月は五十銭も上るかと思つたに、この模様ではお流れだ、と言つて嘆いて居やした」

「どうでござしよう、先生、その女も足の骨を折られた位で……」

「しかし、人間は信用がなくちゃ駄目だね。私なんかのように貧乏人で、能の無い者でも、難有いことには皆さんが鼻顧にして呉れてね。此頃も斎藤書記官に逢いやした時、お前は今いくら取る、と言いやすから、九円になりやしたと言つと、九円？ 九円も取るか、と大層喜んで呉れやして、九円取ればいいだろう、と言いやすのさ。そりや私独りなら柔ですけれど、家内が大勢でなかなかやりきれやせん、と言いやしたら、よしよしその中に又乃公が骨を折つて上るようにしてやる、と言つて呉れやした」

「どうでござしよう、先生、その女も……」

「噫、貧苦ほど痛いものは無いね。貧苦、貧苦、子供は七人もあるし、家内には亡くなられるし——加に子供は与太郎（愚物）ばかりで……。なあ、君、私も斯様に貧乏して居て、それで酒ばかりは止められない。この楽しみがあればこそ活きてる。察して呉れ給え、酒でも飲まなげりや居られんじやないか」

「どうでござしよう、先生、……」

「地方裁判所なるとなると、どうも流石に違つたものだね。君、『テブル』が一疊敷もあろうかと思われる位大きくて、その上には青い織物が掛けてもあるし、肘突なんかもあるし、腰掛には空気枕のようなやつが付いてて、所長の留守に一寸乗つて見ると——ぶくぶくしていて、工合のいいことと言つたら。君、そうして廷丁が三人も居るんだよ。それで呼鈴と言うので、ちりりんと拈ると、そのまあ、ちり、ちり、ちりん、

の工合で誰ということが分ると見えて、その人がやって来ますね。大したものですなあ」

すこし話が途切れました。月のさした窓の外に蟋蟀の鳴く声が聞える。蛾の大なのが家の内へ舞込んで来て、暗い洋燈の周囲を飛んで居りましたが、やがて炉辺へ落ちて羽をばたばたさせる。書記は煙管の雁首で虫を押えたかと思うと、炉の灰の中へ生埋めにしました。

「先生」と源は放心した人のように灰の動く様を熟視めて、「先刻の御話でござますが、足の骨を折られて死んだものがござしようか」

「有りますとも。足の傷はあれでなかなか馬鹿にならん。現在、私の甥がそれだ——撃ち処が悪かったと見えて、直に往生つて了つた。人間の命は脆いものさ……見給え、この虫の通りだ」

「ははははは」と源は愚かしい目付をして、寂しそりに笑つて、「万一、その女が死にでもしたら、先生、奴さんの方はどうなりやしよう」

「そりやあ君、知れきつて話さ。無論、捕らあね。人を殺して置いて自分ばかり助かるという理屈はないからな」

「ははははは」

源は返返つて笑いました。人間は時々心と正反對な動作をやる——源の笑いが丁度それです。話好きな書記は乗氣になつて、

「あの子についちゃ実にかわいそうな話があるんでね。私はお隅さんを見ると、鱗痕の入つた茶碗を思出さずに居られやせんさ。まあ聞いて呉れ給え」

と前置をして、話し出したのはこうでした。

お隅の父親がこの男と同じ書記仲間で大屋の登記役場に勤めて居る時分——お隅も大屋へ来て、唯、有る家に奉公して居ました。根が働好な女

で、子供の世話、台所の仕事、そりやもう何から何まで引受けて、身を粉にして勤めましたから、さあ界限でも評判。お隅が遠い井戸から汲々と水を担いで通るところを見掛けた者は、誰一人褒めないものが無い位。主人の家というのは少許引込んだ処に在って、鉄道の踏切を通らねば、町へ買物に出ることが出来ないのです。お隅はよく主人の子供を負って、その踏切を往たり来たりした。丁度、そこに線路番人が見張をして佇立んで居て、お隅の通る度に言葉を掛ける。終には、お隅の見えるのを楽みにして待つて居る、という風になりましたのです。ある日のこと、番人が休暇で自分の家の前に立つて居ると、そこをお隅は子供を負いながら通りました。お隅は無理やりに呼込まれて——その番人というのは、すばらしい力のある奴ですから、さんざんに嚇かされたり賺されたりして——それから気がついて見ると、いつの間にかお隅の身体は番人の腕の中に在ったか言うことで。子供は二人が喧嘩でもするのかと思つて、烈しく泣いたということ。子供は二人が喧嘩でもするのかと思つて、烈しく泣いたということ。子供は二人が喧嘩でもするのかと思つて、烈しく泣いたということ。

間もなくお隅はこの番人と夫婦になりたいということを、人を以て、父親のところへ言込みました。

お隅が迷いもし、恐れもしたことは、それから又間もなく夫婦約束を取消したいと言つて、父親の許へ泣いて来たのでも知れる。お隅は小鳥です。その小鳥が網を張つて待つて居た番人の家へ出掛けて行つて、前の約束を断ろうとすると——獣慾で饑渴いた男のことですから堪りません、復たお隅は辱しめられました。番人は手柄顔に吹聴する、さあ停車場附近では専ら評判、工夫の群まで笑わずには居りませんのです。とうとうお隅は父親へ置手紙をして、ある夜の間に紛れて、大屋を出奔してしまいました。

父親がこの書記に見せた手紙の中には、無量の悲哀が籠めてあつたということ。鉄釘流に書いた文字は一々涙の痕で、情が迫つて、言葉のつづきも分らない程。それは主人へ対して申訳のないこと、朝夕にまといつく主人の子供も嘸ぞ後で尋ね慕うかと思えば慄然なこと、「これも身から出た錆、父さん堪忍して呉れ、すみより」としてありましたそうです。父親は無学な娘の手紙を読んで、その上に熱い涙を落しましたとのこと。

「という訳で」と書記は冷くなった酒を飲干して、「ところが同僚は極の好人物だもんだて、君どうでしょう、泣寝入さ。私は物数寄にその番人を見に行きやした。丁度、直江津の二番が上つて来た時で、その男が鍔頭笠を冠つて、踏切のところに緑色の旗を出して居やしたよ。え——君はその番人をどんな男だと思ふえ。せめて年でも若いのかと？へへへへ、いやはや大違い。私も魂消たねえ、まあ同僚と同一年位の爺じやないか」

源は蒼くなつて、炬に燃え上る檜の焚火を見入つた儘。

「それから一月ばかり経つて」と書記は思出したように震えながら、「私は一度あの子に行逢つたがね、その時のお隅さんは——へえもう、がらりと變つて居やしたよ。蟬谷のところへ紫色の頭痛膏なんぞを貼つて、うるんだ目付をして、物を思ふような様子をして、へえ前の処女らしいところは少許もなかった。私があの子を見ると、罅痕の入つた茶碗を思出すと言つたは、こういう訳で。君もその番人の顔が見たいと思うでしょう。なんなら大屋の停車場へ序に寄つて見給え。今でも北の踏切のところに立つて、緑色の旗を出して……へへへへ」

「先生、もう沢山」